

吾が魂の八犬伝

作・高谷信之

人物

尾上 虎十郎(座長)

尾上 染丸

中村 桃之丞

中村 美雪

板東 板三郎

市川 夢

市川 子団子

片岡 春香

沢村 鬼五郎

坂田 美代

尾上 学丈(学)

菊千代

寺島

権

坂田 佐馬之助

辰造

守田 栗次郎

鉄

刑事 1

刑事 2

第一幕 第一場

音楽——劇的に激しく入る。舞台上手より数名を含む村上兄弟に追われた菅野六郎右衛門と菅野の若党山本佐次郎が走り出てくる。この二人を囲んで激しい立ち回り、つけが入って、菅野と佐次郎は斬り殺される。村上達は一且去るト、そこへ中山安兵衛が花道からさっそうと現れる。

安兵衛 安兵衛武庸（たけつね）ただ今参上——やゝ、遅かりしか！（ト伯父菅野を抱き起こし）伯父上、もはや、こときれ給いしか、残念至極、今少し早かりせば、むざむざ最期はさせまいものを、返す返すも無念至極——佐次郎、御主人の供して、共々敵を相手に斬り死にいたしたか、天晴であるぞ、武士の鏡、中山安兵衛褒めてつかわす……伯父上、この敵必ず討って、修羅の妄執はお晴らし申す。そこにて御覧あれ——（ト下げ緒を取ってたすきにしようとする）とプツリと切れる、縄を拾ってたすきにする。トその時）

女 も——し、しばらくお待ちあれ、それなる若人、縄のたすきは不吉でござります。手前は浅野内匠頭家臣、堀部弥兵衛金丸と申す者の家内、これなるしごきは娘の物にござりまするが、これをお貸し申しまするゆえ、たすきに遊ばしまするよう、心ばかりの助勢でござります。（ト娘の締めていた緋縮緬の扱き（しごき）帯を差し出す。）

安兵衛 おゝ、御好意かたじけなし。(ト扱き帯を受け取りたすきがけして)

やあやあ、村上兄弟はいずれにある、中津川祐範はいずれにある。

菅野六郎右衛門の甥、中山安兵衛武庸、伯父の敵、家来の仇、この所において打ち取りくれん。

ト「おゝ」と口々に言いつつ村上兄弟をはじめ数人が出てくる。

村上 やあ中山安兵衛とは汝のことか、飛んで火にいる夏の虫！

中津川祐範 我こそは中津川祐範、こしやくなり安兵衛、返り討ちにしてくれるわ。

安兵衛 何を！覚悟せい！

女達 安さーん、しっかり！

立ち回り、村上側はまたたく間に斬り殺される。血振りをして刀を納め、やがて安兵衛、伯父の死骸を抱き起こし

安兵衛 伯父上、お恨みをお晴らし申してござる。これにて成仏下さりませ

(ト念じ更に、佐次郎を起こし)佐次郎、その方の恨みも晴らしたぞ、

これにて成仏いたせ、一季半季の身軽い奉公の身ながら、主人共にここに命を捨てるとは立派な魂、天晴忠臣、安兵衛はめ取らずぞ。

ト涙にくれる。

中途から起き上がってそれを見ていた村上役の座長がしゃべり出す。

座長　　待て、待て、待て、待て！

安兵衛こと坂東板三郎　待てとおとどめなさりしは、あれッ、違うかな芝居――

――座長だめですか、やっぱりきまりません、きまりませんか。

座長　　駄目だ――なっちゃいねえ。

中津川こと中村桃之丞　見ろ！手前にやあまだ十年早えとよ、いいか、俺がこ

の一座じゃ花形なんだ、そこんとこ、ね座長。

座長　　うーん。

板三郎　　きまつてねえかな、夕べ一晚寝ずに考えたのにな――

菅野こと市川子団子　あのなあ、間が悪いんだよお前、こう斬るだろう唐竹割

で、その後だ、その後、間がねえんだよ、胴斬りではらうまでに――

遍、見え切る位の余裕があつて。

座長　　そうじゃねえんだ。

子団子　　みろ！そうじゃねえんだ、間はどうでもいいんだ。

板三郎　　けッ、コロコロ変わりやがつて。

子団子　　何？何か言ったか。

板三郎　　いいえ。

桃之丞　座長、あつしにやらして下さい安兵衛を——もう一遍やってみましょう、初めから、どうなんです。

娘役こと中村美雪　やっぱり桃さんがいいわ、桃さんには色気つてもんが……

桃之丞　るせえ、黙ってる！女の口添えで主役に戻ったとあっちゃあ、中村桃之丞役者がすたるわ——

美雪　ふん、何さ、気取っちゃって。

斬られ役こと坂田佐馬之助　座長——あんたもしかして……

板三郎　座長、もう一遍、あつしにやらしておくんなさい、稽古、きめますから、ちゃんときめます。

母親役こと尾上染丸　座長どうなさったんですか。

桃之丞　手前がいけねえよ板三郎よ、どだい、花形やれる柄じゃねえんだ、見ろ、だから座長だって考え込んでしまうのよ。

板三郎　桃之丞の兄さん、あつしやあ何も、手前がしやしやり出ようってんじゃねえんで。

桃之丞　何だと！じゃあ何で、おめえが中山安兵衛やるのよ。

板三郎　それは座長が——

桃之丞　人の所為にしがって、斬られ役でいいんだ手前なんぞ！

えッそれをこれみよがしに、ものほしそうな顔するから、座長は情の深い人だから——おめえ困っちゃまって……

板三郎　そりゃあ、あんまりだ兄さん。

桃之丞 何でえ、何でえそのツラは、その目は、えッ、手前、寝る所もなく

てこの一座に乞食みてえに転がり込んで来た三年前を忘れたのかい。

染丸 やめなよ、桃さん――

桃之丞 いいや、やめねえぞ俺あ――いいか、手前なんぞは、丹下佐善が橋

の上でチャンチャンバラバラやる時に橋の下にいる梅毒病みの乞食

の役でいいのよ。

板三郎 兄さん！勘弁ならねえ。

桃之丞 何を！

つかみ合う二人

座長 やめろ！手前達――違うんだ！

子団子 何が違うんで――

座長 俺がな考えてんのは出し物よ、新しい――

染丸 新しいってあんた――

春香 ねえ、あんた肩もんでよ。

沢村鬼五郎 あいよ、春香、ここかい、ああこつてるね首、かわいそうに、よ

しよし。

子団子 こら手前達いちゃいちゃしてる場合か。

鬼五郎 へいすみません、黙ってやります。

子団子 何!?

桃之丞 出し物つて、座長「赤城山」「次郎長」「天保水滸伝」その他にも沢山あるじゃねえですか、あつしの忠治、あつしの次郎長、あつしの平手造酒――

子団子 芝居でなく、手前のことばかり言つてやがつて。

座長 そうじゃねえんだ、皆、聞いてくれ、俺あ世の中のせいにはしたくねえ、したくねえが、この不景気だ――ラジオつて奴もえらい勢いであちこちの家庭へ入つてつてる。それに活動も今はトーキーだ、今までは楽だった、そこそこの芝居やつてりや、村のお年寄りや女子供で小屋は満員、派手におひねりだつて飛んで来た――だがどうでえ、近頃は――人の頭よりポカッと空いた土間の座布団の方が沢山舞台から見えちまうつて様さ――だんだん世の中ぶつそうになりやがつて、やれあれはいけねえ、これは禁止――

鬼五郎 何とかせにやあ、いけませんね、座長――

子団子 お前本当に分かつてるの。

春香 わかつてますよねえあんた。

鬼五郎 ねえお前。

板三郎 座長やめて下さい、弱気になるのは。

座長 弱気になんかなつちやいねえ! いねえが何か新しい手を打たねえと。

桃之丞 このままじゃ先が知れるか――

左馬之助 何人いるんで。

座長 何だ左馬之助。

左馬之助 今一座は何人で？

桃之丞 きまってるあ、裏方の辰さん入れて9人でさあ。

座長 俺を入れて役者十人。

左馬之助 十人か虎十郎一座で丁度いいや。

座長 おい、左馬之助しやれを言ってる場合か。

左馬之助 八犬伝――

座長 うん？

左馬之助 八犬伝はどうです、おらずとあつためてきた――

座長 ちつとも、変わりやしねえじゃねえか。

左馬之助 いいや、ちったあ趣向が違うんで。

桃之丞 例えば――

座長 例えば――

女が一人入ってくる。

女 あのうち……何でもいいんです、下足番でも、下働きでも――使って

下さい、お願いします……私……私東京から……こうして、こうやって……

座長　　おい——（卜女房の染丸を促す）

染丸、女の方へ近付こうとして

音楽、暗転

SLの汽笛と走る音入る

女　　揺れたなら風、揺れなければ夢——ポツカリと空いた胸の隙間に煙

が、陸蒸気の煙がしみ込んで、つらいだなんて、言えもしない——

女ですもの出来れば添いとげたかった……汽車の窓にそつと薬指で

あなたの名前を書いてみました、鉄命と……そして乱暴に手のひら

でその字を消したら、曇ったガラスの向こうは、暗い畑と、黄色い

家の灯り走って——お願い、灯りを消して、その幸せそうな灯りを

——夢ならば遠く、旅ならば涯しなく、揺れて風——揺れなれば

私夢になりますいつでも——

暗転

第一幕 第二場

柝^きが入り、上手前光の中で、（ちゅう）大法師役の坂田左馬之助が語り出す。

左馬之助 東西、東西、ここもとお目にかけまするは、文化も文化十一年、一

八一四年、かの高名なる曲亭馬琴によつて成された「南総里見八犬

伝」——演じまするは、八騎人、尾上虎十朗一座にてござりまする。

今を去ること四百九十年の昔、時の將軍足利義政の時代と言つてよ

くわからなければ、お立ち会い——ドイツはかのグーデンモルゲン

ならぬグーデンベルグが活版印刷を發明した頃の事、えッ余計わか

んない？よろしい、とにかく昔も昔大昔という事にしておこう。

安房の国は今で言う千葉県、ここに一人の悪い女が居た——この女、

神余（かなまり）城の城主長狭介景貞の側室、妾である。景貞、この

女の色香に迷い、夜毎夜毎の酒池肉林——

座長の扮する景貞を囲み、その傍らに玉梓に扮する先ほどの女がしどけなく

居て、車座になった人々の中で馬鹿騒ぎが始まっている。

栗次郎

春香

美雪

染丸

子団子

野球するなら、こうゆう具合にしやさんせ、アウト、セーフ、チヨ
チヨイがチヨイ！

子団子

うわあー、又負けた（等と着物を一枚脱ぐ）

ト野球拳が始まっている

玉梓に扮した女夢が鬼五郎の処へ近付き

玉梓に扮する夢　ねえ、定包（さだかね）いつになったら、あの景貞を討つ

の、私もう我慢ならない、あの人の傍にいただけで虫酸が走るわ。

山下定包に扮した鬼五郎　玉梓、機会を待って下さい、やがて天の時が――

夢　待てないわ、待てないの私、定包、お願いあの人の首を早く私に――

鬼五郎　しかし――

夢　いいわ、ではお前には頼まない。

鬼五郎　待って下さい。

夢　フフフ……今夜、臥床（ふしど）で待ってるわ、ごらん、ほら、

こんなに肌がほてって……（ト山下の手を取って胸へ入れ）いいね、

明日にも景貞を討つのよ、さもなければお前の謀叛景貞に打ち明け

るよ！

鬼五郎　そんな！

座長　おい、玉梓、こっちへ来い！

夢　はーい、殿、夜風にあたっていました、少し酔ったので……（ト座

長扮する景貞の処へ戻る）

左馬之助　全くもって呆れ果てた女、一方丁度この頃、文武両道に秀でた、一

人の男里見義実が従者を連れ、密かに安房に漂着したのであります。

波の音入る

板三郎の扮する義実 返す返すも虚しいことよ、遙かこの海に向こうでは城は落城、父とも家族とも離別し、その生死さえ分からぬ有様、やつとの事でこの安房まで辿り着いたが、さてこれから先、何をどうしたものか……

子団子扮する従者 人は何かを起こす時、必ず虚しい処から旅立たねばなりません、今、若の虚しさこそが力です。遠く訪ねれば、里見家は源氏——源氏の白旗こそ、何かそこへ新しい色を塗る為の空しい色、純白です——若は十九になったばかり、ここでこの安房であなたは何事が大きな事を成さばなりません——

板三郎 よし、この虚しさを埋める為にも——

左馬之助 一方、山下定包は、ついに玉梓の甘言に乗り、主君景貞を討つ——

座長 うーん計ったな、定包——玉梓——（卜血に染まって倒れる）

夢 （笑っている）死ね！この世に用なき愚鈍の輩——（笑ってる）

鬼五郎 （笑う）これよりこの城、山下城と名を替える、いいか、者共、殿は不慮の事故によつて亡くなられた——これからはこの俺が、この

城主だ、フッフ……なあ、玉梓（笑う）

板三郎 埋めようぞ虚しさを！

子団子 あの下城に攻め入って！

板三郎 よし！

板三郎、山下定包を斬る――

鬼五郎 こんな――しかしこんな馬鹿な！（ト倒れ死ぬ）

玉梓が従者によつて縄目をかけられている。

板三郎 玉梓、面を上げい――

夢 フン、若造が！どこの馬の骨ともわからぬ者が、苟くも私は山下定包の側室――

板三郎 ほごくな女！前の城主景貞の側室（そばめ）でありながら、定包と密通し、あまつさえ主君を惑わし、政道にすら口を入れ、忠臣を退け、定包の陰謀、悪逆に加担し、しかもその身は栄耀栄華に明け暮れ、何の愧らいもなく、今こそ天罰を思い知れ。

夢 女は三界に家もなし……わたくしは先君の正室ではありません。主君亡き後、寄る辺ない身を定包殿に想われて……そう罪――罪深い女……でもそこはか弱き婦女子のこと、命ばかりはお助けください、もしもあなたに情けがあれば――

板三郎　——情けがあればか……よしそれならば許してやろう、この義実、

女子供を刀にかけたとあつては——

辰造　殿！騙されてはなりません。真の逆賊こそこの淫婦玉梓、こ奴を許

しては、城下の民も、殿が色香に迷われたと申しましょう。どうぞ、

御決断を！この女を討ち首に——

板三郎　うーん、しかし

辰造　殿！

板三郎　……分かった、玉梓の首を討て！

夢　義実！いう甲斐もなき痴れ者！

板三郎　何だと

夢　そうではないか、一旦許すといいながら、家来如きにいいくるめら

れ、人の命をもて遊ぶとは何事！

板三郎　許さんぞ玉梓！

夢　（笑う）殺さば、殺せ、子々孫々の後までも畜生道に追い落とし、

煩惱の犬となって仇を報いん！

子団子が玉梓の首をはねる、血しぶきが上がる

音楽

左馬之助 げに恐ろしきは女の怨念——煩惱の犬となりて仇を報いん——以来、この玉梓の怨霊が、安房に住みついた里見家にとりついたのであります。

さて、話変わって、同じく安房の国富山（とみさん）に名もなき一匹の犬が生まれた——

大役の桃之丞がチンチンのスタイルで不意に舞台奥に現われる。

他の出演者は下手側に控えている。

桃之丞 ワン！

左馬之助 しかし驚いたことに、この犬、ひとつ子ひとりっ子、犬のひとつ子は珍しいと飼い主の百姓技平（わざへい）もその将来を期待した。

期待されたワン公も困ったが（技平に扮する鬼五郎のマイムもある）

桃之丞 ワン、ワン

左馬之助 ある夜一匹の狼にその母犬を殺されてしまう、その為、孤児ではなく狐犬となってしまったこの犬淋しげに夜毎鳴きくれるのであった。

桃之丞 ワン、ワワン

左馬之助 違うだろうが、桃之丞、子犬なんだよ、子犬はクン、ククーンだろうが。

桃之丞　えッ？クン、ククーン（やや納得いきかねるが）

左馬之助　ところで飼い主の技平という百姓——（子団子が自分の鼻づらを指差す）そうそう（ト子団子に）こいつが大酒飲みのだらしのない奴で、犬に餌なんか与える甲斐性なんぞはこれっぽっちも持っていない。ああこれでこの犬も飢え死にか、勝手にしやがれ、犬の一匹二匹とほったらかしていたが一向にこの犬くたばるどころか丸々と肥えて成長する。それを怪しんだ技平、ある日、その秘密を解かんとして物陰に隠れて夜を待つ。やがて日は落ち、誰（た）そ彼（かれ）と見分けもつかぬ、黄昏時、犬畜生とて母恋しいか……

桃之丞　ククン、クーン。クーン

左馬之助　と泣き叫ぶ、丁度その時、遠く暮れなずむ東南（たつみ）の空の彼方から、鬼火か人魂かとおぼしき流れ星のような光が矢のように流れ来て——

光が音に合わせて矢のように飛ぶ。

左馬之助　中天からはたと落ち、犬小屋のあたりに消滅するや、富山の方角から、一匹の狸が現れて、狸現れて乳をやる……おい、春香。お前、お前！

春香　あたし……あたし狸？

子団子 決まってるじゃないか、見てみる、狸っていつて、皆の視線がスー

ッと集まるのはお前しかないだろうが、ほら。

左馬之助 一匹の狸が現れて――

スーッと皆の視線が春香に集まる。

春香 やだ――私狸だなんて。

桃之丞 るせえ！俺だつて犬やってんだ。

左馬之助 犬が口きくな！

桃之丞 えッ！（ト云いかけて左馬之助の氣迫に押され）クン、ククーン。

座長 おい！左馬之助、先へ進めろ！

左馬之助 はい――とにもかくにもやがて成犬となりこれは珍しいと、里見の城に召し抱えられたこの犬、八房と名づけられました。首と尾に八つの斑（ぶち）があつた為であります。

桃之丞 ウーワン、ワン。

左馬之助 この犬しかし希代の^{うしろ}獰猛な犬――だがこの城の伏姫にはとてもなついたのであります。（中村美雪が伏姫に扮する、板東板三郎が義実に扮して）

法螺貝の音、合戦の声、人馬の響、動めき聞こえる。

左馬之助 さて若干の時が巡って、この里見義実の居る滝田城、安西景連に攻められて、今正に落城寸前。

辰造 殿！いかが致します。既に籠城も七日、ろうじょう将兵の疲れも最早限界―兵糧乏しくこのままでは飢えを待つのみです。

板三郎 わしの不徳の致す処だ、領内に五穀実らず、既に糧食も尽き、さりとて戦うすべもない――この上は城中の士卒を殺すのも忍びがたい、その方共、今宵の闇に紛れ、西の門より逃れ命だけを全うせよ。

辰造 では殿ご自身は――

板三郎 予は城に火をかけ、妻子を刺殺して、死する覚悟だ。

辰造 殿！それしか術はないのですか！

板三郎 ない！

辰造 殿！（ト男泣きに泣く）

八房が寄ってきて尾を振る。

桃之丞 ウーワン、ワン。

板三郎 八房………お前も哀れな犬よ、餌もなく、飢えてよろよろと片足上げてふらふらと。

桃之丞 （小声で）おい、いいかげんなむつかしい台詞を言うな。

板三郎 難しくありません。

桃之丞 よろよと片足上げてふらふらとなんて出来るか、そんな芝居が。

左馬之助 おい、犬はしゃべるなといったろう。

桃之丞 冗談じゃねえよ！なんで、この花形の桃之丞がクンクンとかワンワンしかセリフがないんだよ、えッ？

左馬之助 犬が主役なんだ。犬が花形の芝居なんだから。

桃之丞 それにしたってさあ、なんとかなんないのこの格好、ワンワンワンパターンのセリフばかりかし。

座長 お前なあ、犬だって、一通りの鳴き方じゃねえんだぞ、一吠え一吠え、微妙な意味つてものがあるんだ。おまけに、ワンとかクンしかねえのか。キャンとかキャキャンとかクエンクエンとか、アメリカじゃあれだぞ、犬はバウワウって鳴くそうだよお前——ちったあ芝居つてものを勉強しろ！お前花形なんだから、立ち役なんだから——

桃之丞 へい——キュキューンクエー

板三郎 （かまわず入る）犬も主人の恩は忘れぬという。お前も十年の恩義を知るなら敵の陣に忍び入り、敵将の景連の首でも喰い殺してこい！

桃之丞 クエーン、クワーン。

板三郎 もし功を立てたなら、飽きる程に魚肉をふるまうぞ。

桃之丞 クエーン。

板三郎 何、食えんと、魚肉では不足か、領地か、土地をやるか。

桃之丞 イラーン。

板三郎 何？それでは伏姫を嫁にしてやろう。景連の首喰い殺した暁には。

桃之丞 ウーワン（ト大きく吠えて下手へ去る）

左馬之助 さて、言の咎（とが）——つまりはたった一言の言葉によって、運

命が波乱を呼び、思いもかけぬ展開をすると、この時里見義実は考

えてもみなかった——畜生といえどもそこは賢い八房、犬を馬鹿にし

てはいけません。

桃之丞 四つん這いで、景連の首をくわえ、威勢よく登場。首を舞台中央に投げる。

子団子 や、これは何だ！あゝ。

板三郎 おゝ、これこそ宿敵景連の首、でかしたぞ八房！

美雪 まあ、八房こつちへおいで、お前、よくやったね、お前があ首を。

桃之丞 クンクン。

美雪 よしよし、さあその血にまみれた口をぬぐってあげましょう。（ト桃

之丞の口を自らの唇でぬぐう）

子団子 殿！敵陣はすでに乱れております。

板三郎 よし！者ども、敵の大将景連の首討ち取ったり、遅れる者は犬にも

劣るぞ！いざ城を出て一気に攻めよ！

法螺貝の音。鬨（とき）の声、合戦の響き、やがて光の中に左馬之助 一人

左馬之助 口は炎の門、我が生涯の過ちだったと安西景連の軍を平定し安房四

国の国守となった里見善実が後につぶやいたが時既に遅く、犬なり
といえども八房、肉をやろうと、餅をやろうと、頑として受けつけ
なかった。八房の想いは、あろうことか褒美として伏姫をもらう事
ただ一つ――

桃之丞 ウーワン、ウー

ト伏姫の着物の裳（もすそ）を割っている。

美雪 いけません八房、そのような事は！

子団子 こら、八房！

染丸 離れなさい八房

夢 無礼であろう、畜生の身で！

板三郎 おのれ八房、如何に大功あったとて、主君の姫に手をかけるとは許

さん！（ト刀を抜き切りかかる）

猛り狂う、桃之丞扮する犬。

美雪　お黙り八房！——お待ちください父上——父上、一国の太守たる御

方が犬畜生の非を咎め、お手打ちなさることはお止め下さい。

板三郎　よし、分かった伏姫、お前に免じて刀は納めよう。しかし——

美雪　いにしえにより、君主の綸言（りんげん）汗の如しと申します。

父上は、八房にわたくしを授けるとおっしゃいました。それがたとえかりそめのお戯れとはいえ、約束は約束——約を返じて山海の美食を与え、綾錦の臥所あやにしき　ふしどを賜るとて八房は納得しないでしょう。考えますればこれも前世の業報——

音楽入る。

左馬之助　——玉梓の怨霊おんりょうは果たして何を呼ぶのか、八房と伏姫、やがてこ

の二人、いや一匹と一人の女、宿命の妖しき旅へ出るのです——場

面変わって富山（とみやま）の山深い洞の中に犬と姫君が住むこと

とあいなります。

美雪扮する伏姫と桃之扮する八房の場。洞の中、深夜風のざわめき、虫の声、

野鳥の鳴く声など、伏姫の傍らに座っている八房。

美雪 あゝ、なんてじめつとした夜なんだろう、寒いわ、八房……お前は

いいね、毛皮におおわれていて——お前幸せ？——

桃之丞 ウー

美雪 わたくしとこうして二人つきりで幸せかい？

桃之丞 ワン

美雪 わたくしは幸せ？——それとも——言つてご覧八房。

桃之丞 ワン

美雪 どっちなの一体！

桃之丞 ワアーン（淋しげに）

美雪 いくら賢いといつても、所詮は犬畜生——わたくしを幸せになんか

出来っこないじゃないか……何よその目は——何か文句があるの？

あるなら言つてご覧、言葉で、人間の言葉でさ——

桃之丞 ウーワン……

美雪 どこまでいっても独り言——お前知ってる？知りはしないわね。

わたくし七つの年まで言葉がしゃべれなかった………笑うこともな

く、ただ泣いて、陰気な子だった——だからいつも独り言、たった

一人で自分の胸のうちに、いろんな想い、いろんな事言つて……人

偏に犬と書いて伏せる、伏姫とは因果な名前——

桃之丞　　ワン、ウー

美雪　同情、憐れみかい、犬に憐れに思われたらもうおしまい……三つの時、母に連れられてお参りに行つたの、口がきけるようになって……その時一人の老人に逢つて、この数珠をもらつたの、分かる？分かるかいお前、ここにはね、人の道が八つ彫まれているの、仁、義、礼、智、忠、信、考、梯――

この数珠のおかげよ、私が七つになつてもものを言えるようになったのは――分かる、分かりっこないわね、お前には……何とか言つてごらん、ワンとかウー以外に何かしゃべつて！

桃之丞　しゃべつていいのですか（ト静かに）

美雪　お前――

桃之丞　しゃべつてよいのなら、この想いのたけを、いつまでも語りましよう、おつしやる通り私は犬です、犬畜生です、しかし、私の獣としての情欲だけであなたを、このような寒い処へ連れて来たのではありません――

美雪　八房――では何なの、何の為に――

桃之丞　何の為に問う事が虚しい人間の性です。問う事によって何かが変わるのなら、いくらでも叫びなさい、何の為なのかと――しかし――

美雪　はぐらかすのはやめなさい八房、お前、私が欲しいのだろう私のこの体が――

桃之丞
……

美雪
そう、答えられないの、でも、その目をみれば分かるわ、でも約束は忘れたわけではないでしょう、ここへ来る前にした約束は――

桃之丞
はい。

美雪
お前が人のけじめを破り、それをわきまえず情欲に走るのなら――
その時はこの懐剣によって、ただちに私は喉を突きます。

桃之丞
何故だ、では何故こんな犬畜生と一緒にこのような山の奥深く迄！

美雪
八房――今しがた、何故と問う事の虚しさを言っていたばかりではないか、それに犬畜生に人格はない――犬は犬のまま気の向くままに――

桃之丞
分かった――それでは、その言葉通り、犬は犬なりに気の向くまま
(ト伏姫に手をかける)

美雪
何をする！

桃之丞
お前を抱く！その為だけに奪った！

美雪
許さんぞ八房！

桃之丞
抜け短刀を！刺せ、刺してみろ。

美雪
八房！（ト短刀を抜く）

桃之丞
己を刺すか、それともこの犬畜生を血に染めるか。

美雪は短刀をかまえたままで後ずさるが

美雪　　八房！

桃之丞　刺せるか、刺せる筈はない、どちらも――

美雪　　嫌！やめて！

桃之丞は美雪伏姫の短刀をもぎとる

桃之丞　姫―お前をこんなにも――こんなにも（ト姫の衣を取り抱き締める）

美雪　　嫌！八房、お願い――

桃之丞、美雪を倒しその口を吸う

美雪　　あゝ、八房…お前、本当は私、私本当は、待っていた……桃之丞―（ト

美雪は桃之丞を強くかき抱く）

音楽。暗転

第二幕 第一場

昭和十年晩秋、日暮れ時、夕日が差し込み、空っ風が吹き抜ける楽屋裏、土

間である。七輪に火を熾している女(菊千代)、火吹き竹でフーフーやっているが、火が中々熾きない。奥から赤ん坊の泣き声が聞こえている。組板の上で大根を細く切っている夢。

子団子と板三郎、手拭と桶を手に入って来る。

子団子　そりゃあ、お前、満州しかねえよ。

板三郎　満州——しかし受けますかね、満州で八犬伝が。

子団子　受けますかってお前、日本人が続々と渡ってんだぞ——そいつらだつて一山当てようとひっちゃきになってら、だけど人間何処へ行こうと、娯楽つてもんがなきや、そりゃあ女も居る酒もある、しかしそれだけじゃねえだろ、とにかくこれからは何をやるにしても満州よ。

板三郎　子団子さん、行ったことあるんですか。

子団子　あるともお前、内地と違うぜ、お天道様だつて満州だ、内地よりはこう数倍でええな、夕焼けだつてこう血を塗りたくつたような色でなあ……

夢　嘘ばかり——

子団子　えッ、あッお前居たの。

夢　板三郎、あんたこの人の言う事信用したら、ろくな役者になれな

いよ、しゃべる事十のうち九つはほらなんだから。

子団子 おめえ——言うに事欠いて。

板三郎 俺は西遊記の方が受けると思うがな。

子団子 西遊記？そんなものが受けるわけねえじゃねえか……

いける、いけるよ、あの猿と豚と屁のカツパが出る奴だろ——

座長に言ってみな、いやおれが話してやる、満州で西遊記、こいつあ

いい——

春香と鬼五郎、湯の支度をして手に手を取って出てくる

春香 姉さん、銭湯先に行かせてもらいます。

夢 春香もうすぐ食事だよ支度しなきや。

春香 でも当番じゃないもんね——鬼五郎。

鬼五郎 うん、僕達明日だもんね——

夢 それにしてもさ——

鬼五郎 子団子の兄さん、銭湯空いてました？

子団子 ああ空いてるよ。

春香 よかった女湯から声かけても聞こえるもんね空いてると。

鬼五郎 よかったね春香。

春香 ねえブランコで行こう（卜腕にぶら下がる）

鬼五郎　　そうしよう（ト二人出て行く）

子団子　　ケッ！

板三郎　　何ですか、あの二人。

子団子　　役はどうでもいいが、相手役同志じゃないといやだって座長に云っ

てるんだとよ……駆け落ちだって、ドラマだねロマンだね、いいね

え、そこいくと古女房……・

夢　　馬鹿いつてんじゃないよ、湯冷めするよあんた——それに子供が泣

いてるのが聞こえないの、ちよつと寝かしつけて来てよ。

子団子　　おい、板三郎頼むよ、お前子供好きだろう。

板三郎　　そりやあ嫌いじゃないけど……子団子さんの子でしょ。

子団子　　だから……な、ちよつとアメでもしやぶらしときや寝るんだ。

夢　　あんた！

子団子　　ほら、な——（調子変えて）おい板三郎、子供位うまくあやして寝

かせられなきや、いい二枚目になれねえぞ！

板三郎　　はい（ト奥へ去る）

夢　　全くもう、この人は——

子団子　　おい、冷やでいいんだ、一杯だけ——

夢　　駄目だつていったらう、板に上る前は——

子団子　　ケッ——せっかくいい湯だったのにとくらあ——（女の方へ近付き）

おい、何やってんだ、火はこうやっておこすの（ト女の背後から抱

きかかえるように火吹き竹を持ち）始めはちよろちよろ中ぱっぱつ
ていつてね、分かるだろう、アレと同じ、アレとき――

菊千代　ふふふ……（トものうく笑う）

苦々しく見ている夢

豆腐屋のラツパと声聞こえる

声　　トーフイ、ナマアゲ、ガンモドキ――トーフイ――

夢　　あんた！（ト女に）急いで豆腐五丁買って来て（トガマ口から金を
出す）

菊千代　あッ、はい（ト金を受け取って駆け出す）

夢、大根を切っていた包丁を振り上げて子団子の背後に忍び寄る

子団子　（フト気付いて）おッ、お前、なッ、何するんだ――

夢　　あの女に手え出したら、これだよ、いいあんた、今度こそチョン切
るからね。

子団子　俺あ、おめえ何も……

夢　　新しい女とみりやすぐそれなんだから、狎れ狎れしくしやがつて。

子団子　火、火の起こし方知らねえから……

夢 余計なの、そういうことが。

子団子 だって、あの女は誰とでも寝るって……

夢 何？

子団子 いいや女郎だったんじゃないかって。

夢 誰が！

子団子 たっ辰っあんが。

夢 辰っあんがそんな事言うわけないだろう。

子団子 ちッ、違った、桃之丞が――

夢 嘘ばかり、おどしじゃないよ（ト更に包丁をかまえる）

子団子 いや、いや俺が――俺がそうに違いねえって――

夢 あんたまさか、あの女ともう――

子団子 いいや、まだ。

夢 まだとは何、これからっていう意味なの。

子団子 違うよ、俺赤ん坊寝かしてくるよ（ト外の方へあわてて行きかけ）

夢 そっちじゃないだろ。

ト急いで入って来た女とぶつかり、豆腐が土間に落ちてしまう

菊千代 あっ

子団子 うわあ――

菊千代 お豆腐、落ちちゃった……

夢 何やってんの！二度買うお金はないんだよ、拾って洗うんだ！ぼけ
なす女が――

菊千代 すみません……

子団子 いいんだ、いいんだ（ト拾おうとして）

夢 あんたはあっちだろ！

子団子 あ――まだ持っている包丁！（ト奥へ駆け込む）

入れ違いに興行主（といってもやくざの親分のようなもの）若い衆を連れ座
長と出てくる

座長 どうか寺島さん、仕切って下さい、お願いします。

寺島 無理だな。

座長 東北の方でもいいんです。

乾分 無理だと言ってるだろう。

親分 お前は黙ってな。

乾分 お前は黙ってろよ。

寺島 手前のことだ！（ト乾分をはり飛ばす）
こぶん

座長 このままじゃ、一座は解散です、どうか親分さんのお力で――

寺島 出し物は面白えのかい。

座長　そりやあもう。

寺島　そりやあもう何でえ。

座長　八犬伝です。

寺島　八犬伝？知らねえな。

乾分　あれですよ、八犬伝って、ほら八つの球が飛ぶ話、仁、義、礼――

寺島　（いきなりはり倒し）おい手前、乾分のくせに、親分より教養があると思われてえのか――

乾分　そんな、あつしは…

寺島　白い者を黒といわれても親が言ったら子が従うのがこの世界だ、手前、親分の俺が知らねえといったら、手前も知ってちゃいけねえんだ！

乾分　すみません、すぐ忘れます……

寺島　で？仁・義の話なのか

座長　はッ？はあ、まあそういった…

寺島　そうか――その芝居には仁義がきっちりと入ってるんだな。

座長　ええ。

寺島　任侠道の話か、任侠道を発見する話なんだな……

座長　それが……

乾分　（座長の袖について）そういう芝居ですよ親分。

寺島　てめえ！（トなぐりかけて）

乾分 はい、忘れました。

座長 そういう芝居です！（ト中に割って入り）

寺島 北は寒いぞ。

座長 はッ？

寺島 これから冬だ、北は寒かろうってことよ。

座長 それじゃあ。

寺島 大船に乗った気でいるんだな、きつちりと北関東から東北は俺が仕

切ってやる。

座長 親分！

寺島 泣くんじゃねえ、泣くんじゃねえ男が…

乾分 （小声で座長に）泣いて泣いて芝居好きなんだから親分は。

寺島 何をゴチャゴチャ言ってるんだ！

座長 親分！（ト手を取って泣くふりをする）

寺島 男が一生に一度泣く時あ、惚れた女に振られた時よ、はっはっは、

じゃあな——（ト去って行く）

乾分 大丈夫、ああみえても言った事にやあ責任持つのよ、あの親分——

寺島の声 おい！

乾分 ハイ！（ト震え上がってあわてて去る）

先程から見ていた染丸近寄って来て

染丸 あんた——よかったね。

座長 ああ何とか正月だけは越せるかもしれねえ。

染丸 大丈夫——今迄だって何とか切り抜けてきたんだから。

座長 ああ（ト奥へ去る）

染丸 ごはんできた？（ト夢に）

夢 もうすぐできます。

染丸 急いでよ、食事したら稽古やんなくちや（ト去る）

夢 はい——菊千代、サンマ焼けた？

菊千代 こげちゃってサンマ……

夢 えッ？お前——（ト怒ろうとした時、戸口に來た一人の男が目に入る）

男息荒く転げ込むように入って来る

夢 あッ——

男何かに怯えたように入ってきて、立ちすくみ、不意に菊千代を突き飛ばし七輪の上のサンマを取るとむしやぶりつく……・

菊千代 ああ……サンマ……・（呆然と立っている）

夢 学さん――

学 水――水だお夢。

夢 は、はい――（ト慌てて奥へ駆け込む）

菊千代 あんた……飢えてんのね……

学 誰だ、お前――

菊千代 誰って、あんたこそ誰？私は菊千代って名前もらったの、座長から。

学 新入りか

菊千代 ええ……

夢 はい、お水……

水を飲む学

夢 ぼっちゃん、どうしたんです学校――休みじゃないんですよ。

学 おやじ、いるか――

夢 ええ……奥に――姐さんも――呼んできましようか。

学 止めろ！

菊千代 この人……座長の、息子さん？……

夢 そうよ、学ぶさんていつてね、東京の大学で……

菊千代 似てるわ、あんた座長に……

学 よせよ！……ああおとといから飲まず食わずで——おい夢、外見て来てくれ。

夢 えッ

学 誰か怪しい奴追って来ないか……

夢 ぼっちゃん、あんた……

学 ぼっちゃんは止めろ！いいから外——

夢 はい——

学 菊千代っていったな——おやじには気をつけろよ。

菊千代 えッ？

学 好きじゃねえんだ俺——

菊千代 好き嫌いじゃないでしょ、親子なんて……

学 そりゃあ——手が早いんだあいつ。

菊千代 フッフ……そんなこと……

学 そんなことってお前。

染丸 ——夢……（ト出て来て、学に気付く）

学、隠れようとする

染丸 ——学さん……どうして……

学 帰って来ちゃいけねえか、息子が家へ帰って来ちゃあ――

染丸 そんな――なにかあったの、学校で何か――

学 何もありやしないさ。

染丸 でも不意に……学さんあなた――

学 母親面すんのはやめろよ、あんたはただおやじの女だっただけじゃないか。

染丸 学さん――

菊千代 いきなり学を張り飛ばす

学 何だ、このあま――

菊千代 ――甘いよあんた……何だか知らないけど、甘えてんじゃないよ……

……皆ギリギリなんだから、ギリギリで生きてんだから。

染丸 ……菊千代――

立ちすくむ学

夢 誰も追って来ないよ――（ト言っに入って来て染丸に気付き息をのむ）

音楽

暗転

第二幕 第二場

光りの中、左馬之助現れる。

左馬之助（八大伝の語りとは違う調子で）……子供の頃、私の親父が蕎麦屋

をやっていました。屋号はわらじ……七つの時、朝早くたたき起こされ、その日の仕入れる蕎麦玉を、坂の上の、そう、距離にして往復一里はある家へ取りに行きました。右の肩に蕎麦玉の入った箱をのせ、左手でこう押さえて……帰る道々、あまりの空腹に一つ、また一つと、蕎麦の山をくずしては生のまま口に入れ、気が付くと箱の中は空っぽ——不意に家へ帰るのが恐ろしくなって、そのまま、家出してしまったことがあります。

何を隠そう、あの里見義実の下、安西景連の城へ敵陣視察に行き、戻る途中三十騎の追っ手に囲まれ、やつとのこと逃げ帰れば、城は最早炎上、呆然として闇の中に消え以来消息の杳として知れなかった金碗大輔という侍が、この私、坂田左馬之助の役所なのであります。一旦は京都へ上りこの私金碗大輔は將軍を頼ったのであります。

……がしかし書状を持っていない為怪しまれ、將軍は来てもらえず、乞食同然に追い払われ、安房に取って返せば——城は既に里見義実公

が平和に治め、まるで何事もなかったかのように穏やかに立っていたのです。——家を出た少年の日の私が、やがて帰って来た夕べに見る家の中からもれる暖かい電灯の光——光の中から聞こえる団欒の樂しげな声——それは淋しいものです。淋しくて敷居なぞまたげたものではありません……やがてお決まりの放浪……その風の便りに聞く八房と姫のいたましい噂——私はこの銃を取つてあの富山に登らずにはいられなかった——おのれ八房！お前を殺して姫を取り戻すぞ、畜生道から人の世界へあの姫を——（ト銃を構える左馬之助）

伏姫
（読経）さんぜん しゅじょう ほつぼだいしん じとくじゅき ち
しゃくぼさつ きゅうしゃりほつ いっさいしゅじょう もくねん
しんじゅ……

八房がゆつくりと歩き出す。左馬之助の銃が火を吹く、八房は鳴きながら倒れる——と背後にいた伏姫も倒れる。

左馬之助 姫！——伏姫様！（ト駆け寄り抱き起こす）ああ何と言う事を——
犬だけではなく姫までも、我が成す事、ことごとく食い違つて——すみません！姫、この上は申しわけに腹かき切つて、姫君の冥土の御供つかまつります（ト刀を抜き腹さばかんとする）

里見義実こと板三郎 待て、金碗大輔！

左馬之助 殿！——申し訳ありません、八房を殺すつもりが姫を——

板三郎 あわてるな大輔（ト姫を抱き起こす、そして首にかけられた数珠を
ゆつくりと回す）気付いたか姫。

伏姫こと美雪 父上……

左馬之助 姫君、金碗大輔です、お気付きになりましたか！

美雪 おお大輔——なつかしいのう……八房は？

左馬之助 八房は私が殺しました。

美雪 ああ、何という事を……私は……この私は——（ト泣き出す）

板三郎 恥じる事はない姫、お前の身の潔白は誰もが信じている、八房の死
は不憫である、しかし大輔の手にかかったのも何かの因縁——大輔
はわしが心で姫の女婿と決めていたのだ、滝田の城へ帰り、病み衰
えた母を二人で慰めてやってくれ！

美雪 父上、時を逸しました。

板三郎 ときを逸したと……

美雪 いつくしみ下さる父母のありがたさは身にしみず、出来る事なら
……父上の心に決めた夫がこの人とは——この期に及んで……それ
はあまりにもむごい！

板三郎 何故だ伏姫。

左馬之助 何故ですか姫、何故遅い、その身が潔白ならば！

美雪 （笑う）何故？何という虚しい問いなの……この私のおなかの中に

一体何があるとあなたがたは思っているのですか——（ト言いざま短刀を自らの腹につきたて切り裂く）

音楽

伏姫の腹から白い煙が立ち昇り、それは天空を舞って八つの珠となり、空に飛び散る

板三郎　あッ、伏姫！お——（トその光景に幻惑されてただ佇むのみ——）

間があつて再び、大輔は自らの腹に刀を立てようとし

板三郎　大輔！自分で死ぬ事は許さん！大罪ありと申し立てながら、君命を待たず自害せんとは返す返すも不所存者である。余が成敗してつかわす、そこへ直れ！

左馬之助　はあ！（ト刀を差し出し合掌する）

板三郎　首まで持つて行った刀を止め、もとどりを切る。

左馬之助　殿！——

板三郎　わしの心を知るのなら、仏に仕え、姫を守るのだ。

左馬之助 殿——今より私、日本の隅から隅まで巡って靈山靈社を巡礼し、伏

姫様の後世をとぶらい、我が君御一門の武運を祈って——

板三郎

みな八房が因のことである。大輔、大の字に点を添えて、ちゅうだい大と法名を名乗れ——ほら、この数珠をお前にやろう。

左馬之助

はッ、ありがとう御座います。私はこれから本当の旅に出て、飛び去った八つの珠の行方を尋ね当て百八つの数に満たして、再び殿の前に見参致します。年経ても帰参しない時は、なお旅から旅へその行方を探し野晒しの苦行を続けているかあるいは…

板三郎

あるいは？

左馬之助

飢えたる獣の餌食になり山野に果てたと思って下さい。

板三郎

分かった行け！大輔、いや、ゝ大法師——

左馬之助

はあッ

ト歩き出し前の定位置へ出て来る左馬之助。奥の明かりは消える。

左馬之助

こうして私事、ゝ大法師は旅に出たのです。八つの珠を探し出す為の果てしない旅へ……（調子変わって）お待たせしました、本芝居の主人公、八剣士登場！

音楽

八剣士それぞれの出方で登場

子団子 犬江親兵衛 仁（さとし）

左馬之助 靈玉に書かれたる文字 即ち仁——（仁の字が舞台に現れる 以下

同様に）

虎十郎 犬川莊助 義任（よしとう）

左馬之助 靈玉に書かれたる文字 即ち義

桃之丞 犬村大角（だいかく）礼儀（まさのり）

左馬之助 その玉に書かれたる即ち礼なる文字

染丸 犬坂毛野 胤智（たねとも）

左馬之助 同じく書かれたる文字 即ち智

学こと尾上學文 犬山道節 忠与（ただとも）

左馬之助 靈玉に書かれたる即ち 忠

板三郎 犬飼現八 信道

左馬之助 同じくその文字即ち 信

菊千代 犬塚信乃 戌孝（もりたか）

左馬之助 その玉に書かれたる即ち孝

栗次郎 犬田小文吾 悌順（やすより）

左馬之助 靈玉に書かれたる文字 即ち悌

子団子 仁！

虎十郎 義！

桃之丞 礼！

染丸 智！

学丈 忠！

板三郎 信！

菊千代 孝！

栗次郎 梯！

左馬之助 さて、そろい出でましたる八犬士——はるかかの悪女玉梓の怨霊に

端を発し、八房から伏姫——そしてその姫の腹の中より、天空に光

輝いて散った八つの玉、風雲急なる戦国の世に、いかにして出会い、

いかにして戦ったかは、この後一時の休憩をいただきまして、一座

心ひきしめまして演じますればしの時のまどろみをお許しくだ

さい。

圻が入り

休憩

第三幕 第一場

音楽やがて風と雨の音。

雨音だけ残って、光の中犬塚信乃に扮した菊千代が立っている。

犬塚信乃こと

菊千代 ……雨。仰げば暗い空の谷間から、この薄い唇に雨降り注ぎ一滴、

二滴——あれは何時だったか、降り始めた雨粒を一つ、二つ、三つと数える裡に、数えても数えてもおっつかない雨の軍団が、前髪から頬そして軀の芯まで濡らし、濡れながらお前は男だよ、本当は女でなくて男なんだと教えてくれて——（刀を抜く）……ひび割れた

俺の心の荒野に降る、名刀村雨丸——抜けば燦然と霧立ち昇り、

つばもと

きつなむ

鏑元から刀尖まで煌々たる七つの星の文様……だがしかし所詮は

刀ではないか、人を斬る為の——父はこの名刀を足利成氏朝臣に献

上し仕官の道を開けと言った、そう言っただけ俺が十一の時、父は自ら

の腹をかつさばいて死んでいった——だが村雨丸よ、名刀とは言え

お前はたかが刀ではないか——刀が人の心を支配して何になる！

——それにしても雨……錆び付いた俺の心の荒野に雨、一滴そし

て二滴……

暗転

村雨丸を傍らに、眠っている信乃、忍び寄る人影、片岡春香の扮した浜路で

あつた。

菊千代 誰だ！（ト素早く起き上がり、闇を透かす）

春香 浜路です。

菊千代 こんな夜更けに何事ですか。

春香 信乃様そんな冷たいことを、明日は古河こがへ旅立つのでしょう、ならばせめて。

菊千代 しかし古河まではたったの十六里、村雨丸を献上し、話をつけて七日の内には帰つて来ます。

春香 いいえ、あなたは再びこの家には帰つてきません。予感がします。

菊千代 何故そのような――

春香 私はいつも親しい人と別れる為に生きて来たような気がします――父は討ち死に母は果て、兄とて今は行方知れず――許嫁のあなただけが私にとって最後の人です――そのあなたを失ったら……

菊千代 言うな浜路――そのようなことを言えば……

春香 言ったら……

菊千代 分かつてくれ、私は武士だ、侍はこの胸の裡にこみあげる激しい想いだけに身をまかせて生きるわけには行かないのだ――

春香 何故ですか――お願い、私もその旅に連れて行つて！

菊千代 出来ればそうしたい。一つの屋根の下で、他人とはいえまるで兄弟

のように生きてきた。しかし何故待てぬ——旅から帰って来て、伯父上伯母上に許しを得て晴れて一緒に——

春香 いけません信乃様——私の口から言わせないで——

菊千代 何を？

春香 確かにあの人達は私たち二人の育ての親です。その恩を忘れたわけではありません、しかし私があなたの留守中にどうされるとお思いですか。

菊千代 何だと——

春香 私を 簸上宮六（ヒカミキュウロク）の下へ嫁がせようと企んでいるのです。

菊千代 伯父の 暮六が？
ひきろく

春香 はい間違いなく、私は聞くともなく聞いてしまったのです。

菊千代 浜路！

春香 信乃様！（ト抱き付く）——私を離さないで、しっかりと抱いて……お願い——私あなたとだけは別れたくない。

菊千代 浜路！（ト唇を合わす二人）

トその時、物陰に隠れていた 鬼五郎扮する処の鋼乾左母二郎（あぼしさもじろう）が忍び寄り、村雨丸を一本の刀とすり替える。

気付かずに抱き合っている二人。離れた所で左母二郎。

鬼五郎

とうとう手にいれたぞ村雨丸——ふふふふ……たつぷりと別れを楽しむがいい——やがて、浜路は俺の手に落ちて——そしてこの村雨丸も（ト自らの刀を抜き）こうやって更にすり替え（ト村雨丸を抜いて）——おゝ、何という光だ、降り注ぐ雨とはよくぞいった、殺気を含むこの輝き——まさに千金の値——この刀と浜路を手に入れ（ト腰の刀と差し替え）ふふふ…見ろ犬塚信乃、貴様などは明日は旅路の果てのしゃれこうべ——

別の空間で語り出す左馬之助

左馬之助 違う、違うんだ座長——

座長 左馬之助

左馬之助 いいですかい座長、いくらはやりだからって女と女が抱き合って何が面白え！俺はこんなエログロの芝居をあつたためてきたんじゃねえんだ——

座長 聞くんだ左馬之助——ちったあ新しい事をやらなけりやあ、受けね

えんだよ——

左馬之助 しかしよりによつて——

座長 いいかそりやあ、お前の言うように、今までどおり女形を何人か入

おやま

れ、添えものみてえに女役を使つてりやあ自然なのかも知れねえ——いや、そうやって事実今迄はやってこれた——途中に歌謡ショーを入れ、立廻りも入って——しかしこの八犬伝は満州へ渡る切符がかかってるんだ——もしそれが失敗したらどうなるんだ一座は——

左馬之助 やめりやあいいで。

座長 何？

左馬之助 確かにそりやあ俺はひねった——八犬伝をひねって、犬と姫君が交わる場まで造った——だがそいつはしかめつらしい顔して孔子の教えや儒教を説いている、あの曲亭馬琴の原作の裏つ側に、邪悪な妖気漂うエロチシズムって奴が俺に見えたからなんだ——だがどうでいい、座長のやろうとしてるのは、まるで少女歌劇じゃねえか、下手すりやあエロだけを売り物にしている下司芝居だ——

座長 左馬之助、口を慎め！俺がどんな想いをして、この八犬伝でやばい橋を渡ろうとしているか、かつては華々しい活弁の弁士だったお前に分かんはずはあるまい。

左馬之助 ……そりやあ、分かりますよ座長……だが淋しいね、俺達あ、一体何の為に芝居やってんのか、勿論客を喜ばす為だ——芝居って奴が憎い程好きなんだ——だけどそれだけかい座長——一座は解散せずを持ちやいいってもんじゃねえでしょ……好きだけで、客に受ける為だけで……こんなことやってられるか……次から次へ違った風に吹

きつ晒らされて……

座長 あれは新宿の武蔵野館だっけ……あんたあ、熱のある狂気のあるいい弁士だった……あの活動なんてたっけ題名——俺あ暗闇の中で思わず泣いたよ、そして明かりがつくと涙を拭いて楽屋訪ねたんだ……あん時は断ったよな、役者なんてとんでもねえって……しかしやがてあんた——

左馬之助 ——座長、止めてください昔の話は——俺あ弁士じゃねえんだ、元弁士でもねえんだ——今は役者です。ただ八犬伝だけは！八犬伝は！——うつ（卜頭を押さえて伸びをしょうずくまる）

座長 どうした左馬之助！

左馬之助 ううつ——だっ大丈夫……ちょっとしびれて、手足がほんのちよつと……

座長 おい！誰か！染丸——

左馬之助 ——満州……行くよ座長、あんたが行くっていうんなら——たとえばそこが地獄の果てだって……行くとも……うつ

座長 ——左馬之助……おい！医者だ！誰か医者！

音楽、暗転

第三幕 第二場

吹雪の音、板戸が風にあおられて時折バタン、バタンと音を立てている。

東北の寒村の公民館——夜——車座になって思い思いの格好で花札をやっている子団子と栗次郎と板三郎、酒を飲んでいる桃之丞等。

桃之丞　どだい無理だったね今度の興行は——旅のつばくろだって冬になり

やあ南へ行くんだ、それを北へ北へって、まるで季節を攻め込むように上がって来ちまって、とうとうどんづまりの大晦日か……

子団子　こんなことは初めてだ、そりゃあ聞いたことはあるよ、前売りを売

るだけ売ってトンズラされちゃったって話。だがどうでい、やっとのことで吹雪の中、駅に降りたちやあ、小屋もねえ、そんな興行の話はきいたことがねえ……おまけに泊まる所もなくやつとこき公民館に素泊まりとくらあ。

菊千代　泊まるところ、あるだけましたよ……・

子団子　そりゃあな、お前はな——だけどこちとら、長いこと芝居やってるが正月や盆ていうのはかき入れ時だよ、正月そうそう舞台が踏めねえなんて初めてさ——そこへいくとお前さんはいいよ、いざとなったら元の稼業に戻りゃあいんだから

菊千代　ふふふ……元の稼業って何？

子団子　おつと俺にそいつを言わせてえのかい――

夢　あんた――止めなよ。

子団子　うるせえ、お前は黙ってる――言ってるうかお前はな――

鬼五郎　子団子さん止めな――

子団子　なんでえ鬼五郎、俺はね――

鬼五郎　ここにいる奴あ、誰だつて脛に傷持つ身ですぜ、だから……

学　職業で人を差別してはいけません。

子団子　差別かねえ若、俺あねえ、みんなが退屈してるんで昔話でもしよう

つて――

菊千代　子団子さん、あたしや構わないよ、何言われたって……それで皆の

気がまぎれるなら――私は女郎だったよ、吉原のね――

学　菊千代！

板三郎　止めろ、そういう話は、聞きたくねえ。子団子さん、どうやったら

俺たちはいいい正月を迎えられるか……

子団子　だから言ってるんだ、役者のいい正月たあ、板の上よ、舞台の上に

立っている正月よ、他に何があるんでえ。

板三郎　だから、どうやったら舞台に立てるのか。

桃之丞　さんざ話したんじゃねえか、自力で芝居を打つ方法――他の町へ移動する方法――だが見ろ、この吹雪きで車もとまっちゃまって――そ

れにここにやあ芝居打てそうな小屋さえ建てられそうもねえ――

板三郎　じつとしとくしかねえのかね、やだやだ、軀を動かせねえ役者なん

て、土の上に放り出されたもぐらみてえなもんで――

染丸　みんな――本当にすまないねえ――あの人も、駆け廻ってるからど

うか皆……

板三郎　姐さん！そうじゃねえんだ、俺達、座長を責めてるわけでも姐さん

を困らせるわけでもねえんだ、そうだろう。

鬼五郎　そうだ！子団子の兄さんいけねえよ。

子団子　何がいけねえんだ。

鬼五郎　兄さんが火付けたんだよ、皆じつと我慢してるのに――

子団子　鬼五郎、手前新入りのくせしやがって、いい格好すんな！手前は春

香とたまたま、駆け落ちの途中紛れ込んで来ただけじゃねえか、手

前に芝居の何が分かるっていうんだ――

春香　この人の言っているのは芝居のことじゃありません。

子団子　何を――

桃之丞　もう止めろよ、子団子。

子団子　しかし――

鬼五郎　昔の事はどうでもいいんだ――そんな事いやあ、俺だつてくさい飯

を食つて来たんだ――

子団子　鬼五郎お前が、ほうそいつは初耳だな。

鬼五郎 いや、止めよう。芝居つてのはあれじゃねえかい。よく分からないが、そういうことなしで。

学 そう、平等です。平等な人間の本来的な姿がこういう一座にはあるべきです。これこそ社会主義の実践だと僕は――

鬼五郎 アカですかい。あつしはそういうのは苦手だなあ……………

学 鬼五郎、アカとかそういう言い方も差別です。

桃之丞 若、分かった分かった、難しい話はなしにしようや、ね、俺達あ大體頭のいい奴はいねえんだから。

鬼五郎 表の戸直してくるよ――（ト去る）

美雪 ――寺島って言ったつけこの興行仕切ってくれた親分――私あの人…………女の直感だけど、あの人ちよつと信用できないって――

板三郎 何を言っただい美雪さん、信用できないからこういう結果になっちゃったんじゃないですかい。

美雪 あゝ、そうか…………そうなの……………

桃之丞 のんきでいいぜ、お前は…………

釘を打つ音、聞こえる。除夜の鐘の音聞こえてくる。

板三郎 ――除夜の鐘か――陰気でいけねえなあ…………

夢 やだね――昭和十一年か――又一つ年取るのか――

——間——

桃之丞 おい、稽古やろうや、八大伝。

子団子 しかし左馬之助のじいさんが倒れちまってからは話続かなくなつて——

桃之丞 だから、続き造ろうつていうのよ、皆で。

栗次郎 皆でつて、どういう事？

桃之丞 あのなあ……

板三郎 いいですね、やりましょう。

辰造 そいつはいい。

春香 でも、口上方はだれがやるの？

桃之丞 ——俺がやるよ。

子団子 しかしあんたは、花形じゃねえか。

桃之丞 今更花形も立ち役もあるか——

学 口上方は皆でやるつてのはどうですか？…

子団子 皆？

学 ああ、交代でやるんだ。

板三郎 しかしそいつは——

染丸 そういう方法もあるよ、いやその方が新しいやり方かも知れない。

学 本当にそう思いますか？

染丸 ええ、思うわ。

辰造 じゃあやろうぜ。

佐馬之助入ってくる

栗次郎　佐馬之助の親父さん、八犬伝の続きを今、皆で稽古やろうって。

佐馬之助　そうか、それはいい。

鬼五郎　（戻ってきて）——客のあても、幕のあくあてもねえ、だが、そんな時に役者が何をやるか、いややってるか……そいつあ稽古しかねえでしょ——新入りの俺が口はばったいが、そう思うんで。

染丸　鬼五郎。

鬼五郎　縁起がいいぜ、百八つの煩惱を洗い流すにやあ、芝居が一番だ、それに——考えてみる、二年に渡って稽古するんだ、大晦日から元

旦——

「よし」「やろうぜ」等と口々に準備をし出す。

栗次郎　ここで見ててください。

左馬之助　ああ。

吹雪の音・・・吹き込んで、美代出てくる。

美代 あのうち……すみません。

桃之丞 あんた、誰？

美代 わたし美代と言います。

桃之丞 美代って誰？

美代 孫なんです。おじいちゃん、尋ねてわたし……

左馬之助 杖をついて出てくる。

左馬之助 美代……美代なんだな。

美代 おじいちゃん……

左馬之助 どうしたんだ、徳子は……

美代 母ちゃんは……母ちゃんは死にました。

左馬之助 なんだって？

美代 胸の病と闘って……頑張って頑張ったけど、駄目でした。

左馬之助 いつのことだ……

美代 一月程前です。わたしお葬式出して、家かたずけて……もう、どこも行くところないし……一座がここに来てるって聞いて……

左馬之助 美代おめえ……

子団子 美代ちゃんとやら、安心しな。俺が座長に言っただけよ。なーに大丈夫さいくら仕事が出来たってあんたひとりの食い扶持ぐらい、

何とかならあ。

夢
あんた。

子団子 一座と一緒に、おじいちゃんの世話をしてやんな。足不自由なんだから…

美代 ありがとうございます。

左馬之助 子団子…

子団子 なんでえ、なんでえ、もういいよ、しめっぽいのはよ。カラツといこうぜ、年が明けるんだ。

吹雪の音高まって権、現れる。

権 え——御一統さん、明けまして、おめでとうございます。いやあ大

変な正月ですな——酷い雪で、ほらぐちより——

子団子 おい、手前はあの寺島の——

板三郎 このやろう！何しに来やがった、半端な事しやがって！

権 おっと、皆さん、もう年が明けるんですぜ、やめましょうや正月早々——

染丸 あんた、どういう事なの、あんたの親分、あれだけ胸を叩いて引き受けたのに——

権 あ、これは姐さん、お見それしやした、あんまり奇麗になったんで

——いやその事なんですがね——ずいぶんひでえ事になりましたね、
興行打てないんですってね。

板三郎 馬鹿にしやがつて、手前せせら笑いに來たのか。

権 待つておくんなさい、威勢のいい兄さん——あつしもね、あの寺島の親分にはあきました。

鬼五郎 呆れたつて、あんたの親分なんだろう

権 元はね——

子団子 元はつて——

権 いや、ですからあつしもね、今回の東北巡業の不始末に呆れましてね、「手前！こうなりや親分でも乾分でもねえ！」つて 啖呵切つて盃返して來やした——

桃之丞 そいつは本当かい。

権 本当も何も——（ト土下座して）いや、めんぼくねえ、申しわけありません——親の不始末は、こうやつて元乾分の私があやまります——どうか許してやつておくんなさい……

子団子 あやまれたつてしょうがねえんだ、芝居が打てねえことにやあな——

権 それなんですよ、あつしの言いたいの——あれ……座長お出かけですか姐さん——

板三郎 この吹雪に村長や村の衆に掛け合いにいつているのよ、何とか芝居

が打てるようにって。

権　　そうですか——それはとんだ事で——いや座長にお話ししようと思
ったんですがね——いい話——御土産持って来たんですよ。

美雪　　——なあに、お餅かなんか。

桃之丞　　おい、美雪——（トたしなめる）

権　　お餅だなんてお嬢さん、冗談がうまい、餅肌のくせしてにくいね——

美雪　　お嬢さんだって——私どうしよう。

桃之丞　　馬鹿！

権　　そういうつまらねえ手土産じゃねえんで——いいですかみなさん満州
ですよ、満州——やつと許可おりました——いやあ、苦勞したですよ。

子団子　　満州——本当かい。

板三郎　　おい、嘘じゃねえだろうな？

権　　ええ、大丈夫——今度はあんな親分にまかせません——私ことこの権が、
いえ、前田権之助が仕切らせていただきます。幸い現地には私の大
学時代の友人が沢山おりましてねえ——力になってくれるんです。

学　　大学？何処ですか。

権　　えっ？何処って私見えません、帝大、帝国大学——

学　　本当に？

権　　いやですね——いくらやくざの乾分やってたからって色々あるんです
よ——インチリ、何とかって奴。

学 インテリだろう。

権 そう、そのテリ。

鬼五郎 あんた、指は？

権 えッ指って―五本づつちゃんと―

鬼五郎 ほお、それで盃を―

権 あッあゝ、私の場合、親分のよんどころない弱みを握ってたんで。

なに、足を洗うたって、指つめるのどうのなんて……

鬼五郎 ふ―んそういうもんかね―

座長が勢いよく入ってくる。

染丸 あんた―

座長 皆――ここで明日打てる！話つけて来た。

桃之丞 座長！

皆の喚声上がる。

子団子 よし、さっそく準備しなくちや―

権 座長、お久し振りで。

座長 お前さん―

権 満州が本決まりで。

座長 何だつて？そりゃああんた確かな事かい――

権 ええ、もう確かも確か――

座長 待ってくれ話はゆっくり聞こう――みんな急いで、準備にかかるんだ。

栗次郎 勿論、演目は八犬伝で――

座長 あゝ、八犬伝だ。

吹雪きと鐘の音高まつて。

暗転

第三幕 第二場

口上役の栗次郎、上手前光の中。

栗次郎 さて、この頃、豊島郡といつても年増の女が柳行孝を持っていたわけではなく、現在の豊島区に一人の世にも怪しげな行者――つまり坊主が現れた、いずこの国の出身かは分からないが、陸奥、出羽で修行をし、吉野、葛城、九州は阿蘇山、霧島等と霊山、名勝をこと

ごとく廻り、この男薪を焼く火の上を踏んでも手足は焼けず、百年前のことも眼の前（まのあたり）に見て来たようにしゃべる。まっこと奇怪な講釈師のような行者であります。そして方々の愚民——愚かなる民を集めて説教することに——

学

それ三界は火宅なり、穢土にいて穢土を知らず、嗜欲しよくに耽りて嗜欲を思わず、愛着あいじゃくに上りて輪廻りんねあり、好悪こうおによりて煩惱ぼんのう多かり、四大原げん、これ何処より来る。おもんみれば悉皆空しっかいなり。十悪いずこより到る、省りみれば一妄想もうちやうのみ、ゆえに諸仏悪趣に出現して、濟度さいどに暇なしといえども凡夫は無辺無数なり、仏性なきものは畜生道中に墮つ——

栗次郎

——何をいつているのか訳が分からない。もっともいつてる本人もまるつきり分かっていません——要約すれば、あゝ、汚れちまった悲しみに、今日も小雪のふりかかり、祇園精舎の鐘の聲、生きてる気持ちになりてえな、馬鹿は死ななきや直らない、いわしの頭も信心から——仏の道を信じなさいと、かような意味であります。

さてこの男このように呟やなごいて、ある日豊島郡、本郷、帝大のあるあたり円塚山まるづかの麓へ人を集めまして、黄昏時しほ、柴を積み上げて火をくべ、この中に銭をくればくべるほど仏の救いがあるとペテンのよいうな事を言い、あつという間もあらばこそ、集めた銭ごと火の中に

かき消えたのであります。

学、火の中に消える。

栗次郎 話替わって、犬塚信乃に旅立たれた浜路——病のところに伏せつてい

ましたが、先程の綱乾左母二郎によつてさらわれた——

鬼五郎 (浜路を小脇に抱えて登場)——ふふふ……浜路ついにお前を手にい

れたぞ。

春香 あ——信乃様！

鬼五郎 (浜路を下に降ろし) まだ未練があるのか浜路——よしならば聞か

せてやろう、見ろ、この刀を(ト村雨丸を抜く)これこそ村雨丸だ

——俺がすり替えたとも知らず今頃は、偽の村雨丸を献上し、足利成

氏朝臣に殺されている頃——いいかげんにあきらめろ！信乃はもう生

きては帰れぬ——そんな男よりこの儂が、存分にお前を可愛がつてや

ろうぞ——(笑う)——さあ浜路——(ト引き寄せる)

春香 お待ち下さい左母二郎殿。

鬼五郎 なんぞ！僕が忘れさせてやるとも信乃なんぞは——

春香 いいえ、もういいの、信乃のことなどどうでもいい——わたしあの人

あんまり好きじゃなかったんですもの——

鬼五郎 おい……嘘じやあるめいな。

春香 この期に及んで嘘を言つて何になりましたよう——私は以前から左母二

郎様あなたを密かに——

鬼五郎 うん、密かにどうした。

春香 お慕い申して。

鬼五郎 本当か浜路——えッ云うて云うて。

春香 何を？

鬼五郎 何をつて、もう一回。

春香 密かにお慕い申して。

鬼五郎 だから誰を——

春香 あなた様を。

鬼五郎 あなたつて誰を——

春香 網乾左母次郎様を——

鬼五郎 左母二郎様をどうした。

春香 しつこいねあんたいいかげん（卜地が出る）

鬼五郎 いいから言うて

春香 （フテくされ）左母二郎あんたを密かに慕つてたのよ。

鬼五郎 うーんもつと色っぽく——

栗次郎 ——全くあきれ果てた男、この男いつも強姦、略奪——横恋慕——ただの
一遍も女からもてたことはありません——

鬼五郎 何？

不意に村雨丸を取り上げた浜路、左母二郎に斬りかかる。

浜路　左母二郎覚悟！信乃のかたき―

鬼五郎　お！このアマ―ふざけやがって人のもてない弱みに付け込んだな！

春香　甘いぞ左母二郎、お前を斬って、この村雨丸を確かに信乃殿へ―

鬼五郎　甘えのはどっちだ、その細い腕で斬れるか儂が、いかに名刀とはいえ、この俺様を斬れるわけがない！ほら来いよ、来いつてんだよう。

春香　信乃のかたき覚悟！（ト斬りつける）

鬼五郎　このう！

ト右に避け、下段に払うのをおどり越え、うしろにさがる浜路を追いつめ。

鬼五郎　おのれ！あま奴（ト浜路を小刀で突き刺す）

倒れる浜路こと春香。

春香　あゝ、村雨丸を奪って、信乃殿を死地に陥れた邪智^{じやちかんあく}奸悪のそなたの

手に掛かって死ぬるとは―この世に月日は照らぬのか―信乃様、もう一度逢いたい、せめてもう一度、誰かあ―あ、せめて一時の命を……

助けてくださいこの私の命……

鬼五郎 なにをほざく、信乃の為に命助かりたいと、よくも言ったな。この

上は、お前のほしかったこの村雨丸で、引導渡してくれるわ！

ト刀振り上げた時、手裏剣が飛んで来て倒れる左母二郎。

鬼五郎 うッ——何奴！

学 いぬやまどうせつただとも
犬山道節忠与——死ね！

ト左母二郎を斬り殺す。

鬼五郎 あ——馬鹿な——せめて、抱いときやよかった——これで死ぬのか——残

念！

ト倒れる左母二郎。

学 遅かったか——正月——むつき（ト浜路を抱き起こす）

春香 どここの、どなたか知りませんが……有り難うございます……

学 お前の名は浜路！そうだな。

春香 ——はい……

学 探したぞ、俺はお前の兄だ！

春香 えッ

学 俺の父は、犬山貞与入道道策——そしてこの俺は犬山道節忠与——聞いたことがあるう。

春香 では、あなたは兄さん！

学 そうだ、お前の幼名は正月——

春香 あ——良かった。ひとりであんな一人で死ぬのかと思ったら……兄さんあなたに会えて……

学 正月、死ぬなよ——

春香 いいえ、もうだめ……

学 正月

春香 ——兄さん、お願い。この村雨丸を、犬塚信乃という方に届けてお願い！

学 分かった必ず届けてやる。

春香 ああ、兄さん良かった会えて……わたしひとりぼっちだった……いつも……でも良かった。

学 しっかりしろ！

春香 (静かに首を振る) 兄さん。しっかりあったため私を……さむいよ、さむいと思ったら兄さん……死ぬって、寒いね——淋しいね、まさか……こんなに寒いなんて……淋しくって、淋しくって、ごめんね、兄さ

ん……（ト浜路は息引き取る）

学 正月！——正月……

虎十郎扮する犬川莊助が現れる。

虎十郎 おい、犬山道節とやら。

学 何者だ！

虎十郎 その村雨の太刀を渡せ！俺は犬塚信乃の無二の親友、いぬかわそうすけよしどう犬川莊助義任
という者だ。

学 誰であろうと渡さん、この刀は—

虎十郎 よしそれならば、腕づくでも。

学 取れるものなら取ってみろ！

二人は組み合う。

学 （格闘しながら小声で）親父！痛えじゃないか、本気でやって。

虎十郎 （小声で）いいか学、まだ手前を許した訳じゃねえんだぞ、大学へ
行ったと思やあ、アカなんぞの手先になりやがって。

学 まだ分かってないのか、マルクスはね—親父さん。

虎十郎 丸くする？丸くできるかこの野郎。

栗次郎 （口上方として困っている）えー、現れいでました、犬川莊助善任、

互いの軀に八犬士の印である処のボタンの花のような刺青いれずみにも気付かず、なにやらぶつくさといいながら、争っております（小声で）
ちよつと座長、お客入ってんだから、やめて親子喧嘩は！後にしてよ——（大声で）後にしてよ！いやもとい、互いに刀を抜き（二人やつと刀を抜く）丁々はっしの大立ち回り。

立ち回りをやるが途中で止めてしまつて。

虎十郎 手前はな、大体、親を馬鹿にしくさつて。

学 なんだよ、親父こそ。

栗次郎 えーこの二人親子ではありません。場面變わつて、場面變わつて——

犬塚信乃。

二人引つ込む。

栗次郎 古河の城へ偽物の村雨丸とも知らず、献上すべく全ての準備を終え、

登城致しました。

桃之丞の扮する横堀史在村よこぼりふりむらとありむらとその他の面々の前で頭を下げている菊千代扮

する信乃。

桃之丞 犬塚信乃とやら、その亡父番作の遺言に従い当家の什宝、じゅうほう村雨丸

たてまつるよしを献 由まことに神妙である――

菊千代 はッ――（ト刀を差し出す）

桃之丞 ここへ差し出すがよい。（村雨丸を抜いて）これが村雨丸か――

菊千代 はい。

桃之丞 重ねて聞く、これが村雨丸に間違いないか。

菊千代 はい、それこそ村雨丸――何か御不審がございますれば――

桃之丞 たわけ者！この横堀史在村の目が節穴だとも思っておるのか！

菊千代 いえ、そのような。

桃之丞 このような偽物で、我が殿を愚弄する魂胆か――怪しい奴、許さん。

菊千代 何をおっしゃいます。

桃之丞 よく目を開けて見よ！これが村雨丸か！

菊千代 ああ、これは――しまった、すり替えられたか、だが一体何処で――

桃之丞 始めから承知の上で、この城に接近しようとしたな、怪しい奴。

菊千代 しばらく、しばらくお待ち下さい。お怒りはごもつとですが、私

持参のこの一刀、この鞘さやより見て、中身をすり替えられたは明らか――

桃之丞 広言無礼な奴、敵方かんじやの間者に違いない。この曲者くせものを引っ捕らえろ！

「おゝ」といつて、一斉に士卒が廻りを取り囲む。大捕物が始まる。

栗次郎 もしこの場で捕まれば成氏は短気で知られた大将、命はないものと

信乃は群がる敵を蹴散らし、白刃しらばの下かいくぐつて、庭へ躍り出た。

松の木から軒端を伝い、屋根の上に飛び来る犬塚信乃——この建物

こそかの有名なる芳流閣——三層の楼閣ろうかくの眼下に、遙かに流るる大

河は蒼々渺々そうそうびようびようとして——

左馬之助 (いつの間にか病んだ身体で杖ついて立っていた) さてこそこれが

芳流閣——三層の楼閣の眼下に、はるか流るる大河は蒼々渺々とし
て葛飾の行徳につながり、海へ通ずる咽喉(のどくび)をなす。

鬼五郎(追つてきて)左馬之助さん! あんた駄目だ無理をしちゃあ。

座長 (出てきて)左馬之助お前——

左馬之助 数百の士卒は楼上に向かって矢を放つが、屋上へ上らんとする者は

一人もない。

子団子 申し上げます殿、かの獄役人で犬飼現八信道が、ただ今造反の罪で

入牢中ですが、やつを外に出し、死罪を許し、代わりにあの男を捕
らえさせてはいかがでしょう。

美雪扮する成氏 よし、左様に取り計らえ、早うせい早う。わらわは見たい。

屋根の上の決闘を早く見たい。

縄目にかけられた犬飼現八が出てくる。

桃之丞　　いいか、その方、武芸無双の達人、なかんずく捕物挙法が自慢なら

ば、見事あの男を捕らえて見よ。さすればお前の命助けてやろう。

板三郎　　はッ、それでは―（卜縄を解かれ、十手渡されて屋根に上り信乃と

相対す）その者、誰かは知らんが、役名によって逮捕する。神妙に致せ！

菊千代　　何をこしやくな！出来るなら捕まえてみよ！

立ち廻り。

座長　　左馬之助――しっかりしろ！これが芳流閣の立ち廻りだ！

いいだろうこれで――えッ？

左馬之助　　あゝ、こいつだ、これこそ正に八犬伝だ――

座長　　いいか左馬之助、これを持って、俺たちは明日、船で満州へ渡る、

お前帰ってくるまでふんばっているよ、いいな！

左馬之助　　馬鹿いっちゃあいけねえ！俺あね、反対なんだ満州なんて、あんな

とこ何もあるもんか。こっちで芝居打たなきや、駄目だよ、座長！

座長　　しかし行くんだ。船はでるんだもう！

左馬之助 だったら、俺も行くよ。皆と一緒に、這つてでも。

座長 駄目だ左馬之助、そいつぁ無理だ――

左馬之助 担架に乗った俺あ、行くからな――

座長 左馬之助――

立ち廻り続く中、音楽。

暗転。

第三幕 第四場

光の中。ペテンの権。格子の光の中

権 こうして一座はあくる日満州へ旅立ちました。着の身着のままで…

…だがあの希望と夢の満州は実は、血まみれの侵略の地であり、幻の国でしかなかったように、彼等がかの地で見たものは幻だけだったのです。

いえ、そりやあつしのせいです。この私の――だが弁解するわけじゃねえが、あつしでなくなつて、あいつらは満州へ行きましたよ。日本列島を渡り尽くして食い詰めて…そりやあ悪い、俺も確かに悪い男さ、大して金もねえ、芝居馬鹿を手玉に取るなんて、だが歴史の河つて奴はもつと腹黒い急な流れなんでさあ―そいつに落ちて流れちまつたら、こりやあ、どうにも……こつこつ決まつてるじゃねえですかい。

石と鉄で囲まれた檻だよ、そんな所でなきゃあ、こんなこと……喋
つてられますか……全くの話。

二・二六事件の兵に告ぐの録音聞こえてくる。軍靴の響き、銃声聞こえ、やが
て汽船の出航を告げる汽笛の音大きく入る――

担架で運ばれてくる左馬之助。手に手に荷物持つて出てくる座員。港。傍ら
に立っている坂田美代。

坂田美代 座長さん、どうかおじいちゃんを連れて行かないで下さいーお願い
です。

座長 美代、お前の気持ちは分かるよ。お前だつてやつとのこと、この左
馬之助を訪ねあてて来たんだ――でもな、俺あ決めたんだ。どうして
もこいつを満州へ連れてつてやるつて――無理は承知さ――それに
第一、あんた一人じゃどうやって、このお爺さんを養っていくね。

美代 私何でもやります。おじいちゃんに会えたんだもの。もう何やって
稼いだつて、きつとおじいちゃんを――

子団子 座長、やっぱり左馬之助のおやじさんをこの子に預けちゃあ。

座長 預けてどうするんだーこんな不景気に、まだ年端も行かないこの娘
がどうやって食わせていくんだ――食い物だけじゃねえんだ、医者

に薬……ただじゃねえぞ――

子団子　だったらあつしがこつちへ残つて――

座長　おい子団子――分かつてるんだよ俺あ――お前嵐富之助一座とやらへ渡りをつけたんだろう――いいよ、いけよ、あそこなら大丈夫だ、

結構流行つてるし。

子団子　座長あつしは、満州へ――

座長　いいつてことよ。お互い正直になろうぜ別れ際だけはな――

子団子　座長！

夢　あんた。

子団子　すまねえ。

板三郎　子団子の兄さん！あんた！

鬼五郎　おい、良くできるな、この期に及んでそんなことが――そりゃあ、

あそこは嵐一座は景気がいいつて聞くよ。しかしそれじゃああんまりじゃねえか！

座長　よせよ皆――こいつにとつちやあむしろ華々しい門出かもしれんねえ、気持ちよく別れようぜ。

左馬之助　（担架の上に身を起し）役者はあれでえ、渡りに船よ。自分にとつていい舞台がありゃあ、そつちへ渡るさ、仕方ねえさ。なあ、子団子。

子団子　左馬之助の親父、勘弁しておくんない。

左馬之助　なあに謝るこっちゃねえ。

座長　そうさ——夢、お前も一緒に行きな——

夢　いいえ、私は皆と一緒に満州へ渡ります。

子団子　おめえ、そんな……

夢　芝居をおしでないよ。こんなところで。どうせこの人は女絡みなん

ですよ座長——

子団子　違うんだそれは！

夢　私は、あんたにこの話聞いてからずっと考えてたの……で結局、あんたと一緒に行かないって……決めたもの。

子団子　気持ちには堅えんだな。

夢　ええ——

子団子　そうかそういう事か——

桃之丞　行け子団子、皆の手がでねえうちに！

子団子　それじゃあ、あつしは、座長、姐さん、お世話になりました。長い

間——皆も達者でな——あばよ！

ト駆け出す子団子。

夢　あんた……

美代　座長さん、あの人切符持ってるんでしょ、船の切符。

座長 あゝ。

美代 じゃあ追いかけてなくっちゃあ、私——（ト駆け出す）

座長 さすがにあんたの孫だ。行くとよ、お美代。

左馬之助 はゝあ、もう一人足手纏いが増えちまったのかい。

染丸 うれしくせに——

左馬之助 フッフッフッフ……

反対方面から出てくる学

学 親父！船が出るって、早くしてくれって——

座長 ああ、あそこにも一人いるぜ足手纏いが。

菊千代 足手纏いなもんですか、若は立派になったわよ、ねえ——。

桃之丞 あゝ、そうとも。

トそこへバナマ帽をかぶった一人の男近付いてくる。菊千代気付いて。

菊千代 鉄！あんた。

鉄 風の便りに聞いたよ、おめえ、ちつとやせたんじゃないかい。

菊千代 何の用——（こらえている）

鉄 いや、見送りさ、満州へ行くんだってな……ふふふまた嘘ついちま

った……潮の匂いをかぎにきただけよ、ブラッとな……

菊千代　今更……何だって今更……

鉄　何てったつけ、あの花だよ。白い幻の風知草。浅草寺に参った帰り……いや止めよう——未練だぜ。

菊千代　止めて！

鉄　俺もわらじはくんだ——微用だよ。軍隊さ。

菊千代　じゃああんた……

鉄　これですつきり別れられる——ほら（ト自分の胸を叩いて）もうコトリとも音しねえや、お前の音こん中で……達者でな……

と鉄は去る

菊千代　……鉄——

刑事二人がやって来る。学気付いて逃げようとするが捕まってしまう。

刑事1　尾上学丈こと木下学だな——

刑事2　署まで、ちょっと来い。

鬼五郎　刑事さん何かの間違いで、こいつは、沢村参十郎って言って私の弟子で——

刑事1 猿芝居はよせ！

刑事2 分かってるんだよ何もかも——それともお前もしょっぱかれてえか。

学 行きますよ刑事さん。私が学です。

座長 お前——

染丸 学さん。

学 大丈夫——すぐ追っかけるから——

刑事1 そいつはどうかな。

刑事2 さあ来い。

学 皆元気だな——左馬之助元気だな！^{のぼり}幟立ててくれよ、満州で、俺き
つと探すから——（いいながら引き立てられる学）

船の汽笛——

桃之丞 座長、船が……

座長 あゝ、乗るぞ皆！

汽笛の音、エンジンの音、波の音あつて……

暗転

第三幕 第五場

昭和十四年頃。満州最北端。黒龍江の河岸の荒野。

砂浜が吹き荒れている。

ペテンの権が逃げ込んでくる。板三郎捕まえて。

板三郎 この野郎待て！

権 お願いです。もう勘弁しておくんない。

板三郎 何をいってやがんだこの野郎。手前のお陰で一座はこの様だ。

権 申し訳ねえ、とんだ計算違いで。

板三郎 計算！何の計算だよ。大連——奉天そして新京、新京からハルビン、
まともに興行なんぞ打てやしねえじゃねえか。

権 いやあ、軍部のしめつけが予想外に厳しくて。

板三郎 何が軍部だ！こっちは芝居が打てりやいいんだこの野郎——（トポ
カポカ殴る）

権 止めてください。痛て、痛てゝ、勘弁してくれ。

染丸 板三郎もうよしな、こいつをいたぶったって芝居が打てる訳じゃな
いんだ。

板三郎 しかし姐さん、今度は今度はと騙されてここは何処だと思ってるで

すかい。

担架で左馬之助を運んで来た桃之丞と鬼五郎。左馬之助を降ろす。美代が水を飲ませる。

鬼五郎 国境だ。見ろ、あの黒龍江のむこうはロシアだよ。

春香 へ——え、この河の向こうロシア。

美雪 砂嵐で何も見えないじゃない、何にも。

桃之丞 ……こつちへ渡つてからもう四年か——ついにこんな地の涯……

美代 おじいちゃん大丈夫？

左馬之助 あゝ、心配ねえ。

板三郎 座長、どうすんですか、こんな何もねえ河原まで、この男に引き連れられて——家の影すらありやしねえ、人っ子一人いねえ荒野で、どうやりやあ八犬伝が出来るんで——

夢 (娘の手を引いている) あんた、座長を責めたって——

板三郎 しかしお夢——

座長 板三郎、帰りてえなら勝手に帰んな——

板三郎 座長！

桃之丞 座長、それは乱暴だ！こんな地の果てから勝手に帰れったって。

座長 いいや、俺あ帰ってほしいと思う——おい染丸あれを——

染丸 はい——（ト荷物の中から各々の分に分かれた紙包みを取り出す）

座長 皆、これが残った銭の全てだ。これじゃあ確かにハルピン迄の汽車賃にもならねえ、うまくしのいで三日か四日——だがこいつは平等に割った銭だ——これ持ってそれぞれ——

鬼五郎 そりゃああれですかい。一座はここで解散ってことですかい——

桃之丞 そうなんですな座長！

夢 座長！

栗次郎 座長！

座長 解散はしねえ、尾上虎十朗一座は、ただ休むだけさ。

板三郎 休むって、しかしここで散りじりになったら……

染丸 所帯が大きすぎて、もうこれ以上身動きは出来ないんだ。みんな本当に済みません。こんなことになって……（ト膝をつき頭を下げる）

鬼五郎 姐さん！止めておくんない。分かってるよ、分かってるとも……

あの八戸の公民館でこいつを見た時から、悪い予感がしてたんだ——

——だが……

権 面目ねえ、皆あつしが悪いんで。

板三郎 てめえ！いい格好すんな！この始末をどうつけるんでえ——（ト襟首

を持ち）

座長 板三郎やめろ！——俺が甘かった。行け権、消えろ手前なんぞ二度

と、俺の目の黒いうちに姿を現すな！

権 　　しかし座長、あつしあ錢持ってねえんで一錢も――

板三郎　この野郎甘えやがって！

権 　　うわあ――、分かった分かったよ、失せるよ。

ト逃げ出す権。追おうとする板三郎。

座長 　　追うな板三郎！追ったりしたら、こっちの格がまた落ちらあ――。

夢 　　格なんてとづくに……

菊千代　いいき、何もなくなつて、よかったら女は皆あたいについておいでよ。私達あ、何時だって生きられる、何も無い処からやっついていけるよ、なあに簡単さ割り切りさえしたらいいんだ――心って奴はどつかへ一時預けといて、軀投げ出すのさ、そうすりゃあ錢も手に入る……入った錢で心を買戻しやあ――

桃之丞　菊千代――おめえしかし、そんなこと……

菊千代　だったら死ぬのかい、こんなところで飢え死にしてくのかい、葱の端でも拾って、口に頬張って……それより生きてりやあ、たとえ女郎だっていつか幸せって奴が夢みたいにやってくるかもしれない、風に吹かれて――

座長 　　菊千代――

菊千代 本当の誇り持ちたかったら、人は生きてなきや……生きなきや――

夢 菊千代――私行くよ、あんたについてく。

菊千代 ――いいよ、でもね、あんただけは母親なんだ。子供の為に軀だけは売らせない。あたしが倍稼いだって――売らせやしないとも。

夢 菊千代……私……わたし……

菊千代 泣くんじゃないよ、こんな所で。休むんだから私達あ、ただ休むだけなんだ、そうでしょ座長。

座長 あゝ、すまねえ皆――本当に……

左馬之助 おい、皆やってみてくれ、最後に八犬伝、見せてくれここで俺に――

鬼五郎 よし、やろう！客は左馬之助のおやじさん一人いりやあ充分だ、な

あ皆――

不意に八犬伝始まる。

桃之丞 さてここは芳流閣、眼下に流るゝ大河は蒼々渺々として、アム

ール河ならぬ、利根川であります。この屋根の上で犬塚信乃と犬飼

現八――一方が手練の太刀筋を發揮すれば、他方が又捕手の秘奥を

尽くして、遙か下から眺める主従士卒は等しく手に汗握り、ただ息を飲むばかり、正に両虎深山に戦う時、風起こり雲湧くとはこの事

か——（二人立ち廻りから組合となる）

互いにもみつもまれつするうち、あつという間に足踏み外し、どうと転げて、屋根をころがりちようと真下にあつた小舟の中に、どしんとばかりに折り重なって落ちました——ここに打ちいでましたる、犬田小文吾、すばしっこいことムササビの如く——

栗次郎の扮する小文吾も出てくる。

美代 おじいちゃん！

染丸 左馬之助！

左馬之助 …夢だ何もかも——いい夢見さしてもらったぜ……

座長 左馬之助！

菊千代 左馬之助さん。

左馬之助 続きは、きつとやっておくなさいよ座長……あつしは河の向こうで

……見てるよ必ず……皆俺の分まで達者でな——

ト左馬之助は息絶える。

桃之丞 おやじ！

美代 おじいちゃん！

座長 ……左馬之助――

涙にくれる一同。

座長 おい――皆、八犬伝の八つの玉のように四方に別れ、もし生き延びていたら、内地で会おう。そして必ずもう一度幟のぼりを上げるんだ、尾上虎十郎一座の幟を――生き延びるとも死んでたまるか――

桃之丞 そうだ、それでこそ八犬伝だ。

美代 菊千代さん、私連れてって。

菊千代 美代……

美雪 私も――

桃之丞 ――美雪……

染丸 私も行くよ菊千代。

菊千代 姐さん――

桃之丞 左馬之助のおやじ！やるぞ内地で必ず――

春香 私別れるよあんたと――私も一緒に行く菊千代達と。

鬼五郎 おめえ、しかし！

春香 ――身軽になって内地へ帰って！また逢うために別れるんだから……

……ね……

鬼五郎 春香――

春香　　でもいやだよあんた。その時になって私を汚れたものを見るような

目で見たら――

鬼五郎　馬鹿野郎！俺が見るか！……見るわけねえだろうそんな目で――

春香　　……あんた――

それぞれが叫びながら消えていく。

鬼五郎　綱乾佐母二郎即ち沢村鬼五郎、消えます。

菊千代　犬塚信乃……菊千代。

美代　　士卒……坂田美代……

夢　　玉梓……市川夢……

美雪　　伏姫……中村美雪……

春香　　浜路……片岡春香……

染丸　　犬坂毛野……尾上染丸……

栗次郎　犬田小文吾……守田栗次郎……

板三郎　里見義実……坂東板三郎……

桃之丞　八房即ち中村桃之丞　消えます。

音楽、ボレロ——そして果てしない戦争の音と光混じり、やがて暗転の中、

終戦後の曲「りんごの唄」聞こえてくる。

エピソード

内地昭和二十一年冬、有楽町、日劇の近く、電車の走る音。

一人の男立っている、復員服姿。やがて座長がやってくる。

鬼五郎 ……座長……

座長 鬼五郎——お前無事に——

鬼五郎 座長はどつちで。

座長 ——現地徹用で大陸を転々としたよ、でもやつとの事で……お前は？

鬼五郎 ——ボルネオからスマトラ……命からがら海を泳いだりして……

座長 他の奴の消息は——

鬼五郎 桃之丞はトラック島で戦死——板三郎もサイパンへもつていかれた

そうで生死の程は……

座長 そうか……女達は——

鬼五郎 さあ、あれつきり……

座長 生きていてくれりやあいいが……

菊千代 (現れる) 死にやあしませんよ簡単に——

座長 おゝ、菊千代——お前……

鬼五郎 あんた……よく生きて――

座長 皆はどうした。

菊千代 ……止めましょう、昔の話は。

鬼五郎 どうして！春香は？染丸姐さんは――

菊千代 私にはとても……あの人達の話は――

座長 ――分かった――三人だな、三人いりゃあ、旗を上げるのに何の不足があるもんか――この焼けた跡に…… 立てるぞ必ず！いいんだな。

鬼五郎 座長！

菊千代 立てましょう――

座長 何時だって、何もない何一つない処から始まるんだ、芝居って奴は

――ほら耳を澄ましてみな、聞こえて来るだろう……あの熱い拍手の

音が――

拍手と客の歓声が入る。「日本一」「虎十郎」「桃之丞」等々。

ボレロが流れて、一座の面々が奥に幻の如く現れる。

参考資料

- 講談「堀部安兵衛」
- 「南総里見八犬伝」 原作 滝沢馬琴